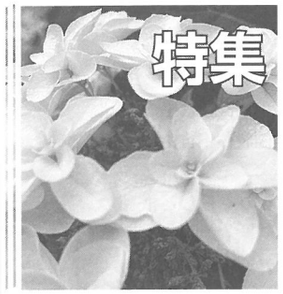

乳幼児期の療育と発達保障

乳幼児期の子育て支援の課題と展望

池添 素

要旨 障害のある子どもを育てる保護者の悩みや困難は子育ての早期から始まる．乳幼児期における専門家との出会いや支援は，その後の子育てに大きな影響を与える．インターネットによる情報が氾濫し，保護者の意思決定が求められる利用契約制度の下では，子どもの障害や発達の弱さを的確に把握した支援に結びつくことが難しい状況も生まれている．児童発達支援の報酬において保護者支援の実施が明確に位置づけられたが，一部の療育機関では，行動修正のスキルに偏重した内容の支援も多い．その問題点を指摘し，児童発達支援の制度化以前から保護者支援に取り組んできた筆者の経験に基づき，子育ての悩みに寄り添い，子どもの障害や発達の弱さを理解し向き合いながら，思春期以降を見通した子育ての指針となる保護者支援のあり方を示す．

キーワード 育てにくい子どもの子育て，子育て支援，児童発達支援，保護者支援

はじめに

障害のある子どもの支援において，どのような段階でも保護者への支援は欠かせない．療育という実践が本格的に取り組まれ始めた1970年代から，さまざまに工夫した保護者支援が蓄積されている．しかし近年，障害児通所支援の児童発達支援などにおいて，報酬単価制度が導入され，営利企業も参入し，療育の市場化が進行している下で，保護者支援が画一化したプログラムで行われるようになっている．

子育ての悩みに寄り添い，子どもの発達の弱さを理解し，向き合いながら，思春期以降も続く長い子育ての指針となるよう，乳幼児期の保護者支援の課題を考えたい．

いけぞえ もと
特定非営利活動法人 福祉広場

1 子育てに向き合う親の現状

（1）育てにくい子どもの子育てのスタート

子どもが誕生するまでのドラマは，子どもの数だけある．苦しい不妊治療の結果やっと生まれてきた赤ちゃんと出会ったパパやママ．望まない妊娠でも，宿ったわが子を育てる覚悟とともに始まる育児．育てられるかの不安いっぱいで迎える出産は楽しみより緊張から始まる．嬉しいはずの赤ちゃんとの出会いが，障害のあるわが子との子育てのスタートになる場合もある．出産という大仕事を無事終えた後で，出会うその瞬間が涙で曇ることもある．小さく早い時期から子どもの障害と向き合う親もいれば，成長した後に発達の弱さや障害と出会う場合もある．いずれにしても，妊娠や出産の中での不安や苦労を経験しながら毎日の子育てを積み重ねている．子どもが親のもとに来るまでのドラマを，支援する側の人たちも共有し，喜びや悲しみ，不安や心配を理解することは，支援の前提として欠かすことができない．乳幼児健診や，保育園・療育の場など子育てを支える場で，今後の障害の受け止めや子どもの様々な困りごとに向き合う親の気持ちを理解した支援にするためにも，心にとめておきたい情報である．

（2）つまずく子育てを支える

子どもの育ちを急かし，なんでも早くできることを推奨する傾向は，近年いっそう強まっている．早期教育や習い事も0歳から始めることが勧められ，いくつもの教室をかけもちして忙しい1週間を送っている乳幼児期の親子は多数いる．また，インターネットからの情報は多岐にわたっており，とりわけ発達障害などは，「育てにくい子ども」で検索すると特性についての説明があり，疑問を少しは減らしてくれる．しかし，親を困らせている行動への適切な対応をネット情報で得るのは難しい．

育てにくい子どもの困りごとは，生まれてから途切れることはない．どの時期に，どのようなことに困っていたかを聞き取っておくことは，その後の保護者支援で必要な情報となる．乳児期はあっという間に過ぎてしまう．しかし，この時期にどんなことで困ったのか，悩んだのかはその後の子育てに影響がある．特に，睡眠やおっぱいやミルクの量，離乳食，機嫌のよい時間の長短などは，子育てを担っている人の気持ちのあり様を左右する．例えば，赤ちゃんが寝ないと親も寝られずに睡眠不足になる．あるいは「寝ても少しの物音で起きてしまう」と，いつも物音を立てないようにと神経を使う毎日となる．育児書通りの量のミルクを飲んでくれない，用意した離乳食を食べてくれないと，イライラの原因となり，家族関係のギクシャクにもつながる．一方で，一見育てやすい場合もある．例えば，おなかがすいたときぐらいしか起きずによく寝る赤ちゃんは，あやしてその反応を楽しむチャンスが少ない．最初は育てやすい赤ちゃんが，その後，困った行動ばかりするようになると，そのギャップから子どもの行動を理解することが難しくなる．育てにくいか育てやすいかばかりではなく，赤ちゃんの嬉しい反応に出会わないことは，子育てのモチベーションにもかかわる．

のちに自閉症スペクトラムと診断された子どもを育てる母親から小さい頃の様子を聞き取ると，機嫌のよい時間が少なく寝なくてよくぐずった，原因がわからずに泣き続けたなどの話が出る．しかしこの時期は，よくわからない子育ての中で，「こんなもの」と不安な自分を納得させ，乗り切ったと言われることが多い．

1歳を過ぎると，歩く，話すなど，「できる・できない」がわかりやすくなる．2，3歳になり，トイレットトレーニングや食事や衣服の着脱など，周りの子どもができ始めると，嫌がってもさせた方がよいのではないかと焦りはじめる．どの年齢においてもそうだが，わが子の「できない」に遭遇した時に一番悩みが深いものだ．「なぜできないのか」がわからず，「どうすればできるようになるのか」をネットで探すなどになることも多い．しかし，その情報がわが子に適切かどうかの判断は難しい．うまくいけば嬉しく，さらにがんばってしまい，うまくいかない場合は，ほかの手立てをまた探すことになる．アドバイスはネット上でも書籍でも，専門家からもあふれている．「できるようになるためのハウツー情報」の波にもまれている状況だと思われる．

親を困らせている事柄について，「なぜそうなるのか」を教えてくれる機会が少ないことが，保護者がハウツー情報を必死に求める要因をつくっているように感じる．障害があっても子どもの発達の筋道はどの子も同じで，どこでつまずいているのかを知ることで，今の困りごとが，子どもの発達を保障していくことにつながっていくと知ると，子育てがずいぶん楽になる．

近年は，障害特性が強調され，それに応じた特別な配慮がことさら求められる傾向がある．しかし，発達障害の特性や配慮点を理解したとしても，わが子の困りごとが同じとは限らない．子どもが拒否していることや不快に感じることを無理に行わなければ，パニックにもならず，気持ちよく子育てや暮らしを営むことができる．しかし，